

大学生のトランポリン競技レベルに関する研究

田 野 有 一

緒 言

北海道におけるトランポリン競技大会の歴史は、1969年(昭和44年)に始まる。北海道体操連盟と北海道教育委員会の主催のもとに開催された「第8回全北海道体操競技選手権大会」(11月21日～23日・北見市)において『トランポリン競技の部』が新設され、六名の選手により競技会のスタートが印された^①。競技に要した時間は、僅か30分である。また、本競技の新設を記念する意味での「トランポリンの模範演技紹介」が実施され、これには演技者として佐藤欣也氏が、解説者として橋本清氏があたり、当時の大会プログラムには『トランポリン競技の見方』と題して競技規則の概略が掲載されている^②。

この年は、我国においてトランポリンが正式競技として認められ「第1回全日本選手権大会(1964年…昭和39年)」を開催してから五年目にあたり、また、我国にトランポリンが紹介(1959年…昭和34年)されてから十年目にあたっている。

現在においては、国内外ともに種々のトランポリン公式競技会が開催され、国際的には最も権威ある「世界選手権大会」(隔年開催)も第15回(1988年5月・アメリカ合衆国アラバマ州)を数えるに至っている。国内的には「全日本選手権大会」が24回を数え(第9回大会は北海道で開催されている…1972年・岩見沢市)、「全日本学生選手権大会」は22回、「全日本ジュニア選手権大会」は15回、そして「全国高等学校選手権大会」は12回を重ねるに至った。

(1) 第8回全北海道体操競技選手権大会プログラム, P. 16, 1969, 11, 21～23.

(2) (1)に同じ, P. 21～23.

ところで、北海道においては「北海道選手権大会」、「北海道学生選手権大会」、「北海道ジュニア選手権大会」がそれぞれ9回、15回、3回を数えており、年を追うごとに選手の競技レベルも向上し、とりわけジュニア選手（小・中学生）の伸び率は、この数年著しいものがあり、全国大会のみならず、国際試合においても我国を代表する選手が出現、上位成績を収めるまでに成長してきている。

さて、こうした中において、開催回数を最も多くする「北海道学生選手権大会（以下、道インカレという）」において、これまで競技記録を積み重ねてきた大学生選手の実力は果して順調な伸び方をみせてきているのだろうか。彼等はこれまでに全日本学生選手権大会（以下、全日本インカレという）や全日本選手権大会のような、いわゆるビック競技会に勇しく挑戦してきてはいるが、そのたびにそれらの大会での上位選手層との隔たりを、そして「強い中央選手群、弱い地方選手群」…の壁の厚さを思い知らされ、望みを次回へ託し今日に至っているのが実情のようである。

一体、中央選手群に比べ何において、どれほどの差が存在しているのだろうか。道内学生選手が演技の習熟率⁽³⁾と難度を前年度のそれより向上させて各種の全国大会へコマを進めても、中央選手群の伸び率が道内選手のそれ以上であるならば、戦う以前に勝負はついているわけで、残るは試合における偶然性しか期待がもてないことになる。

本稿では、今日もなお北海道トランポリン界の先導的役割を担っている大学生選手のうち、とくに男子選手に焦点をしぼり、彼等の競技レベルの実態を大会成績の解析により明らかにし、それを全日本インカレの成績と比較し、演技構成面と習熟率の両面からこれを検討し、道内および全国の大学生選手の競技レベルを把握すべく、考察をすすめたものである。

(3) 筆者が本稿で使う用語で、実際の演技点÷満点演技点×100…で算出した、いわば「出来ばえ率（完成度合）」を示す数字（%で表す）

研究対象と方法

対 象

次の六競技大会における男子 A クラス出場選手中、1～6位入賞者の36名

1. 第11回北海道学生選手権大会
(S58. 5. 21～22, 道立北見体育センター)
2. 第12回北海道学生選手権大会
(S59. 5. 19～20, 札幌大学第二体育館)
3. 第13回北海道学生選手権大会
(S60. 5. 18～19, 岩見沢スポーツセンター)
4. 第14回北海道学生選手権大会
(S61. 5. 24～25, 札幌大学第二体育館)
5. 第15回北海道学生選手権大会
(S62. 5. 23～24, 札幌市南区体育館)
6. 第22回全日本学生選手権大会
(S62. 7. 24～26, 札幌市南区体育館)

方 法

- ・六競技大会に使用した『トランポリン競技カード』の内、規定演技、および自由演技（予選・決勝）の種目ならびに得点記録をもとに、演技構成種目、演技点、難度点をそれぞれ解析した
- ・対象選手全員の演技を収録したビデオテープにより、演技内容の再確認を行った

結 果 と 考 察

●表1の解析

規定でトップに立っていた ABE は、自由1（以下、予選演技という）で9種目中断というハプニングを招いたが、自由2（以下、決勝演技という）でこれを挽回している。規定演技の23.7点（以下、点を省略する）は79%の習熟率で

表1 第11回北海道インカレ・6位入賞者成績 (S58年度)

順位	選手名	年齢	学年	規定演技点	自由			合計点	10種目続行, 中断等
					演技点	難度点	得点		
1	ABE. S	20	3	23.7	予18.4	6.3	24.7	76.7	中断(9種目) ○
					決21.4	6.9	28.3		
2	KIYONAGA. T	19	2	20.7	20.7	5.2	25.9	72.4	○ ○
					20.6	5.2	25.8		
3	MITO. T	21	3	22.1	18.6	4.2	22.8	70.2	○ ○
					21.0	4.3	25.3		
4	FUJIWARA. H	20	3	15.5	18.0	6.4	24.4	65.0	○ ○
					18.9	6.2	25.1		
5	UMETSU. H	21	4	23.1	14.9	5.4	20.3	63.4	中断(7種目) 中断(7種目)
					14.6	5.4	20.0		
6	AKIBA. T	19	2	21.0	17.5	5.6	23.1	62.5	○ ○
					12.6	5.8	18.4		
平均		20.0	2.8	21.0	18.0	5.5	23.5	68.4	中断率 予選33.3% 決勝16.7%
					18.2	5.6	23.8		
					18.1	5.58	23.68		

あり、見事である。同選手の自由演技申告の難度 (=Difficulty Point⁽⁴⁾…以下、D・P という) は7.1であったが、結果的には予選、決勝の両演技ともに、申告どおりの演技は実現できずに終わっている。具体的には、予選演技において9種目めの1¼Front S・S (Tuck型) で中断してしまい、決勝演技では、10種目めのSerolod (D・P 0.8) をBarani Ballout (D・P 0.6) に変更せざるをえなかった。表中のD・Pがそれらの理由により異っている。自由演技での演技点をもとに習熟率を換算してみると、予選では68% (実施された9種目で計算)、決勝では71%となり、両演技ともに70%前後の出来ばえであった。

規定で2位につけていたUMETSUは、自由演技で二本とも7種目中断をひきおこし、5位に転落している。同選手の申告D・Pは7.3と本大会出場選手中最も高かった。しかし、予選、決勝ともに7種目めのDouble Twist (D・P 0.8) で捻り軸の移動のため、身体コントロールができずに中断。結局、本人にとっても未完成のまま試合に臨んだという点で課題の残る大会となったにちがいない。同選手は道インカレ10回大会で優勝を収めているが、残念ながら二

(4) 「トランポリン用語」藤田一郎・宮田和久・田野有一・伊藤直樹・細川賢一・伊熊克己共著、P. 15・15行～21行、1986、4. 文化書房博文社

連覇はならなかった。

この大会での六選手による12演技の平均演技点は18.1と低く、逆に平均D・Pは5.58と道インカレ五大会中で最も高く現れている。

表2 第12回北海道インカレ・6位入賞者成績 (S59年度)

順位	選手名	年齢	学年	規定演技点	自由			合計得点	10種目続行, 中断等
					演技点	難度点	得点		
1	ABE. S	21	4	24.8	予21.6	7.3	28.9	82.9	○
					決22.0	7.2	29.2		○
2	KIYONAGA. T	20	3	22.8	18.7	6.2	24.9	73.0	○
					19.1	6.2	25.3		○
3	KAMIMURA. E	19	2	21.8	19.2	4.2	23.4	68.7	○
					19.3	4.2	23.5		○
4	SASAI. M	20	3	23.2	16.5	6.6	23.1	65.6	○
					14.6	4.7	19.3		中断(7種目)
5	SAWADA. H	19	2	21.0	17.3	3.2	20.5	61.8	○
					17.1	3.2	20.3		○
6	MATSUZAKI. M	20	2	17.5	16.5	2.6	19.1	57.0	○
					17.9	2.5	20.4		○
平均		19.8	2.7	21.9	18.3	5.0	23.3	68.2	予選0% 決勝16.7%
					18.3	4.7	23.0		
					18.3	4.84	23.68		

●表2の解析

11回大会に続き ABE が連勝し、その演技内容は前回に比べ著しい向上がみられた。規定演技での習熟率は82.6%、自由演技では予選で72%、決勝で73%と高率を示し、さらにD・Pにおいても予選で7.3、決勝で7.2と前回よりも予選で1.0、決勝で0.3の上昇ぶりであった。しかし、同選手の申告D・Pは7.9であり、この点では0.6～0.7のレベルダウンしたD・Pとなってしまった。

北海道トランポリン競技界にとって ABE の出現は大きな意味を有する。道インカレにおいて、彼は1年次で3位 (D・P 1.1)、2年次で2位 (D・P 5.0)、そして3年次・4年次と二連覇…という快挙で、進境めざましい「牽引的存在」として注目された。12回大会における同選手の合計得点 (82.9) は、三年後 (即ち62年度) に行われた22回全日本インカレ成績に照合してみた場合、第4位に相当する成績である。(前記の悔いの残る申告D・Pに対するダウンがなければ、計算上では第3位の成績に相当する)

因に、12回大会以後の道インカレにおいて、ABEのD・Pを追い抜く選手はまだ出現していない。ここに北海道学生界のひとつの課題がある。

参考までに、当時のABEの自由演技構成種目(申告)を付記しておく。()の中の数字はD・Pを示す。

1. ½In ½Out …… Pike (1.1)
2. Barani Out …… Pike (1.0)
3. Back S. S …… Pike (0.5)
4. Barani Out …… Tuck (0.9)
5. ½In ½Out …… Tuck (1.0)
6. Barani …… Layout (0.5)
7. Full Twist (0.6)
8. Back S. S …… Tuck (0.4)
9. 2¾Front S. S …… Tuck (1.1)
10. Serolod (0.8)

※ D・P Total …… 7.9

表3 第13回北海道インカレ・6位入賞者成績(S60年度)

順位	選手名	年齢	学年	規定演技点	自 由			合計得点	10種目続行, 中断等
					演技点	難度点	得点		
1	IMUKAI. I	21	4	20.6	予19.5	6.5	26.0	72.9	○
					決19.8	6.5	26.3		
2	KASAI. R	20	3	22.5	17.2	5.6	22.8	69.7	○
					18.2	6.2	24.4		
3	WATANABE. Y	20	3	21.5	14.9	6.2	21.1	67.8	○
					19.0	6.2	25.2		
4	ASAI. Y	20	3	19.6	18.4	3.8	22.2	64.8	○
					19.2	3.8	23.0		
5	MATSUZAKI. M	21	3	19.8	18.7	2.6	21.3	63.1	○
					19.4	2.6	22.0		
5	MATSUDA. M	19	2	19.0	18.8	2.6	21.4	63.1	○
					20.1	2.6	22.7		
平 均		20.2	3.0	20.5	17.9	4.6	22.5	66.9	中断率 予選0% 決勝0%
					19.3	4.7	24.0		
					18.6	4.6	23.2		

●表3の解析

規定演技において習熟率が70%以上の選手は二名で、自由演技においては皆無である。合計得点からみても、順位間にそれほどの差は認められない。自由での演技点平均(12演技合計)は18.6と前回大会より0.3、前々回大会より0.5上まわっている。

演技点からみるかぎり、11回大会から少数ではあるが習熟率が増したのに対し、D・P面では、逆に下降現象が認められ、その平均D・Pは11回大会の5.58から回を追って4.84、4.6となっている。つまり「演技点の上昇傾向、D・Pは下降傾向」を呈し、このことはD・Pを落して演技点で順位を競い合う姿が次第に色濃く出てきていることを示している。

演技中断率は0%で好ましいことだが、トップ選手と6位選手との合計得点差は9.8である。11回大会でのそれは14.2、12回大会では25.9であることからして、いわば「団栗の背競べ」状態にある。その選手群像の中にあって5位、6位の選手のD・Pが12・13回大会ともに2.5~2.6と低劣であり、北海道学生界における問題のひとつが潜んでいる。

表4 第14回北海道インカレ・6位入賞者成績(S61年度)

順位	選手名	年齢	学年	規定演技点	自由			合計得点	10種目続行, 中断等
					演技点	難度点	得点		
1	KASAI R	21	4	23.6	予21.3	6.0	27.3	73.7	○
					決17.1	5.7	22.8		
2	WATANABE. Y	21	4	23.7	18.9	5.6	24.5	73.3	○
					18.9	6.2	25.1		
3	KAMIMURA. E	21	4	21.7	20.4	6.3	26.7	69.9	○ 中断(9種目)
					15.6	5.9	21.5		
4	SAWADA. H	21	4	21.7	17.7	5.2	22.9	68.3	○
					18.5	5.2	23.7		
5	MATSUDA. M	20	3	22.7	18.0	3.6	21.6	64.7	○
					16.5	3.9	20.4		
6	ASAI. Y	21	4	21.8	18.8	4.5	23.3	64.3	○
					15.1	4.1	19.2		
平均		20.8	3.8	22.5	19.2	5.2	24.4	69.0	中断率 予選0% 決勝16.7%
					17.0	5.2	22.2		
					18.1	5.18	23.25		

●表4の解析

演技点において、予選演技よりも決勝演技で高得点をマークできたのは唯一人である。他の五名の内、四名が決勝演技で低く、しかも内三名は決勝でのD・Pが落ちている。このことは、決勝種目が予選種目と内容を異としているなら理解できないわけではないが、殆どの選手はその申告内容を同じくし、決勝演技に臨むことからして、各選手が自分で申告した種目の続行に苦しみ、結局、納得のいかない演技点に終わっていることを物語るものである。つまり「D・Pの高望み姿勢」をうかがい知ることができる。

このあとの15回大会をも含めた過去五回の道インカレにおいては、すべて自由演技の演技点が規定演技点より下まわって現れていることは見逃せない。この理由を考察してみると、一つには、当時の規定問題が彼等にとっては比較的容易に演じられるD・Pであったこと（とは言っても、その習熟率は60%から、良くて70%少々の得点に終わっている）、いま一つは、自由演技を構成する時点で、組み入れる種目が当該選手にとって自信のもてない未完成の状態にありながら使用しているにほかならないからである。したがって、試合中における姿勢と技術欠点に課せられる減点を逆算してみると、いわゆる中過失に伴う減点である0.4前後が各種目ごとに課せられてしまい、結果的には演技点が18点台から20点弱となって表れているのである。これこそ道学生選手にとって重要課題であるといわなければならない。そして、この傾向はとくに14回大会において顕著であり、過去五大会中、平均D・Pが5.18と11回大会に次いでいるものの、その平均演技点は18.1と11回大会のそれと同様に最も低く表れている。

●表5の解析

入賞者六名のうち、2位のMATSUDAを除いたほかは全く新しい顔ぶれとなっている。自由演技における予選・決勝の12演技の平均演技点は19.8とそれまでの四大会のどの平均よりも高く、合計得点（平均）69.9も同様に最も高い。中断者も皆無で喜ばしいことだが、合計得点からみたトップと6位の点差

表5 第15回北海道インカレ・6位入賞成績 (S62年度)

順位	選手名	年齢	学年	規定演技点	自由			合計得点	10種目続行, 中断等
					演技点	難度点	得点		
1	ISHIKAWA. Y	21	3	21.7	予20.6	6.3	26.9	75.9	○
					決21.0	6.3	27.3		○
2	MATSUDA. M	21	4	24.0	17.0	4.9	21.9	73.7	○
					22.4	5.4	27.8		○
3	AOYAGI. K	20	3	22.8	21.4	3.3	24.7	72.1	○
					21.3	3.3	24.6		○
4	NAKAMURA. Y	20	3	20.0	20.4	4.8	25.2	68.4	○
					18.2	5.0	23.2		○
5	YOKOYAMA. K	19	2	21.4	19.1	3.4	22.5	66.0	○
					18.7	3.4	22.1		○
6	SEKIGUCHI. H	20	3	20.2	19.5	2.9	22.4	63.2	○
					17.6	3.0	20.6		○
平均		20.2	3.0	21.7	19.7	4.3	24.0	69.9	中断率 予選0% 決勝0%
					19.9	4.4	24.3		
					19.8	4.33	24.1		

は、12回大会 (25.9), 11回大会 (14.2) に次いで12.7と大きく表れている。

この15回大会での特色は、D・P平均が4.33と、五大会中最低を示し、演技点平均が五大会中で最高であったことからみても、明らかに演技点で順位を争ったことがうかがわれる。これは、自由演技を構成するにあたって、14回大会にみられた状況とは対称的に、選手自信にとってより確実性の高い種目を組入れて大会に臨んだ様子が推察できる。それにつけても、このD・P平均はあまりにも低劣であり、しかも15回大会のみにみられる3位選手の平均以下のD・P 3.3は、演技点にたより過ぎる態度の表れとして強く反省を求めたい。

ところで、道インカレが恒例化され15年の歳月が流れたが、過去14回大会までの優勝者はすべて北見工業大学学生であったこと、そして、15回大会において初めてこれが小樽商科大学学生に移り変わったこと、これらの記録もまた道インカレの歴史上に永く残ることであろう。

合計得点75.9で初優勝したISHIKAWAは、現在3年次生であり、本稿で対象としている道インカレの過去五大会では、11回大会優勝のABEに次いで2人目の3年生チャンピオンである。

表 6 第 22 回北海道インカレ・6 位入賞者成績 (S 62 年度)

順位	選手名	年齢	学年	規定演技点	自 由			合計得点	10種目続行, 中断等
					演技点	難度点	得点		
1	ŌCHI. N	19	2	25.4	予23.1	8.3	31.4	90.0	○
					決24.9	8.3	33.2		○
2	MASUDA. K	18	1	24.8	23.8	8.2	32.0	87.9	○
					23.1	8.0	31.1		○
3	TSUCHIDA. O	18	1	23.4	21.4	7.5	28.9	83.6	○
					23.8	7.5	31.3		○
4	TANIGUCHI. K	19	2	22.9	21.4	6.2	27.6	80.4	○
					23.7	6.2	29.9		○
5	MIYATA. Y	18	1	21.0	19.5	6.2	25.7	73.8	○
					20.6	6.5	27.1		○
6	JYŌGO. K	19	2	18.7	19.4	6.9	26.3	73.5	○
					21.6	6.9	28.5		○
平 均		18.5	1.5	22.7	21.4	7.2	28.6	81.5	中断率 予選0% 決勝0%
					23.0	7.2	30.2		
					22.2	7.23	29.42		

●表 6 の解析

表 6 は、62 年 7 月に行われた 22 回全日本インカレでの 6 位入賞選手の成績である。選手の所属大学を調べてみると、1・2・4 位は大阪商業大学、3 位が大阪体育大学、5 位が日本体育大学、そして 6 位が早稲田大学…となっており、すべて私立大学であること、加えて大阪、東京の大都市（中央）選手であることが特色づけられる。

さらに特色としてあげられることは、彼等の学年平均が 1.5 年という点である。六名すべて 1・2 年次生で占められ、各三名の入賞である。道インカレにおける学年平均をみると、12 回大会の 2.7 年、11 回大会の 2.8 年、13 回・15 回大会の 3.0 年、そして 14 回大会の 3.8 年…ということになり、延べ 30 名の選手を学年別にふり分けた場合、多い順に 3 学年（十四名… 46.7%）、4 学年（九名… 30%）、2 学年（七名… 23.3%）となる。いわゆる上級学年の選手によって 1～6 位の座を占められているのがわかる。これに比して、22 回全日本インカレでの上位入賞の座は下級生選手で占められており、このことは、彼等が大阪・東京を中心としたトランポリン競技界のジュニア選手として活躍後、大学へ進学し、現競技部員として選手生活を送っていることに起因している。というの

も、トランポリン競技の特性からして、また、日進月歩の競技界の現状からしても、競技選手として僅か1~2年間で表6にみられるような演技点、D・Pを獲得することは至難であり、事実、彼等の殆どは10・11回の全国高校選手権大会において上位の座についてた選手なのである。

北海道の場合、大学生選手の殆どが「大学に入って初めてトランポリンを知り、競技会を体験する」ところから、競技の経験年数の面からは論をまたない。しかし、そういった背景をもちあわせた中で、東日本選手権をはじめ、全日本インカレ、全日本選手権…といった全国レベルの競技会に果敢に挑んできた道内学生選手である。そうした選手の実績をふりかえてみると、全日本選手権においては残念ながら特筆すべきものはないが、全日本インカレでは二件残されている。一件は、19回大会（昭和59年）においてABE（この年の道インカレで優勝）が予選得点の49.3を持点に決勝演技で28.6をマークし（演技点20.8 + D・P 7.8）、合計得点77.9で7位、惜しくも6位入賞をのがしている。この大会でのチャンピオン（鶴野健司、大阪体育大学3年）の合計得点96.8（予選得点61.6 + 決勝演技点24.8 + D・P 10.4）で、結局、ABEとの較差は18.9であった。もう一件は、20回大会（昭和60年）におけるIMUKAI（この年の道インカレで優勝）の活躍である。彼は合計得点65.6で北海道選手としては初の「5位入賞」を果している。順位の数では快挙というべきであろう。この時の同選手の予選得点は40.2であり、決勝演技で演技点18.6、D・P 6.8を得ている。トップとの合計得点差は22.7と大差であり、この大会は出場選手全体の成績からしても、いまひとつ精彩に欠ける大会であった。道内学生選手の全国での競技会における活躍は、この二件以外に着眼すべき成績は見あたらず、他に中～初級のレベルで数件の上位成績が残されている程度である。

ところで、22回全日本インカレにおける上位六名の規定演技平均は22.7、自由での12演技の演技点平均は22.2であり、規定との差は僅かに0.5となっており、注視しておく必要がある。習熟率でいえば規定で75.6%、自由で74%となり、しかも12演技のD・P平均は7.23という高得点を出している。道インカレにおける成績との隔りを痛感せずにはいられない。

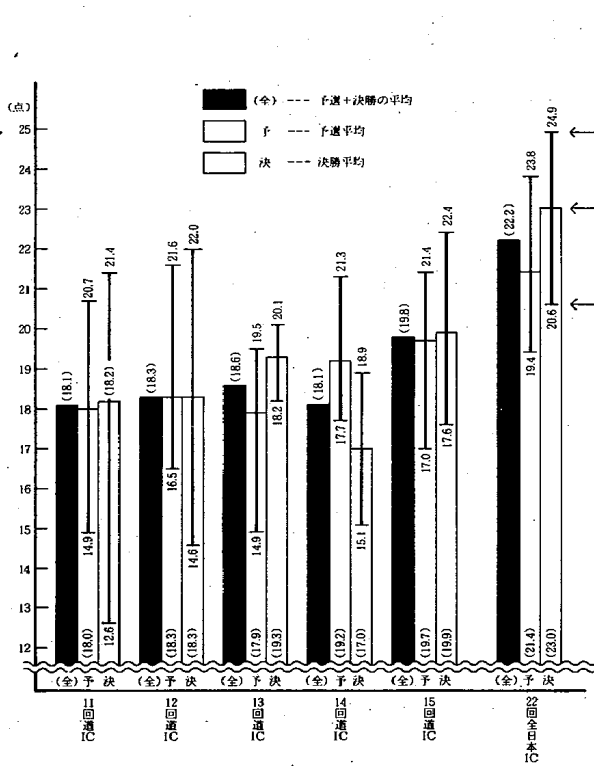


図1 自由演技における「演技点」の年次推移

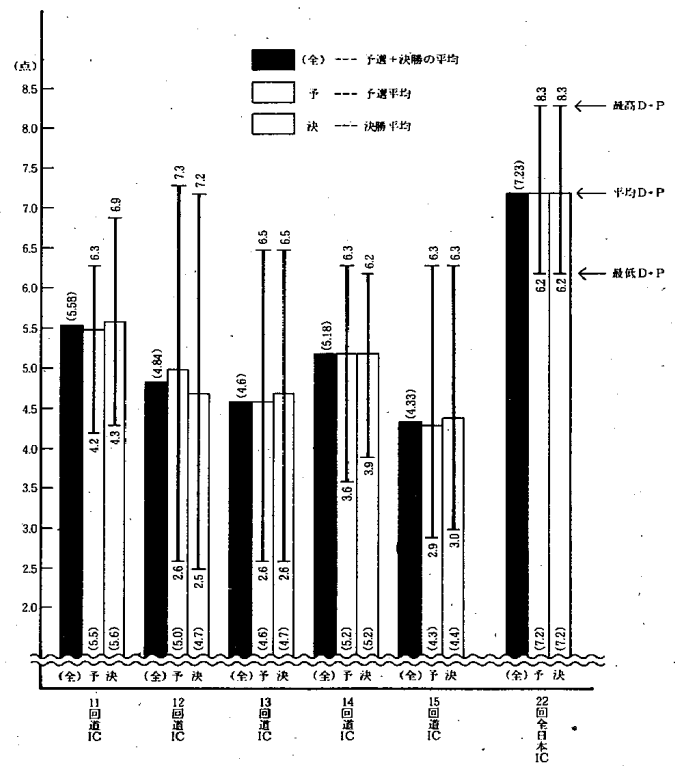


図2 自由演技における実施難度(合計)の年次推移

図1・図2は、演技点ならびにD・Pに関して、それぞれ予選時、決勝時の平均点とその際の最高・最低点を、さらに予選・決勝合計の12演技(22回全日本インカレも同様)の平均点を図示し、年次推移をみたものである。

まず演技点についてみると、全体では平均点において、11回大会から13回大会で上昇傾向が認められ、14回大会で一旦下降(11回大会と同点の18.1)はしたものの、15回大会で再び上昇を示している。しかし、15回大会と22回全日本インカレとの壁は2.2と厚いことがわかる。予選時、決勝時の最高点と最低点では、11回大会が他のどの大会よりもその差が大きく表れており、予選時で5.8、決勝時では8.8となっている。これに次いで12回大会の予選時5.1、決勝時7.4となっている。また一方で、13回大会の決勝時での差は1.9と最も小さく、六名の選手により激戦が演じられたことがわかり、この時の平均点も19.3と15回大会に次ぐ演技点であった。他の大会での最高と最低の差は、いずれも3点台から4点台の数字となっており、22回全日本インカレにおいてもこ

の範囲にとどまっている。

さて、D・Pについての推移をみると、演技点で認められた上昇傾向とは逆に下降傾向が表れている。14回大会で一旦挽回の兆しを見せたが、15回大会では再び下落、それも13回大会の4.6を下まわる4.33となっている。正に「演技点と反比例」の実態がよく出ている。この状況が現れた理由については既に述べたが、D・Pをダウンさせて試合に臨んだ選手の姿があり、演技点が決定する過程で、有効となる三審判員の得点の合計〔もしくは三審判の中間点の3倍⁽⁵⁾〕を試算し、試合に臨んだ選手が多かったことに起因している。

次にD・Pにおける最高・最低の差をみると、大きい順に12大会、13回大会、15回大会、14回大会、11回大会…となり、22回全日本インカレでのそれは2.1（予選、決勝ともに）であった。12回大会の差（予選、決勝ともに4.7）については、前述したABEの活躍による影響が大きく出ており、また、差のいちばん小さかった11回大会の最低D・P 4.2～4.3は、15回大会の平均に匹敵するもので、特筆しておかねばなるまい。これは当時の選手が難度志向を色濃く出していたことを裏づけるものである。

ところで、22回全日本インカレにおけるD・Pと道インカレにおけるその較差をみると、全日本インカレでの最低D・Pである6.2は、14・15回大会の道インカレでの最高D・Pに接近しており、一方、最高D・Pの8.3は道インカレにおける最高D・Pよりも約1.0～2.0も高く表れている。さらに平均D・P（予選、決勝ともに7.2）は、これまでの道内学生選手の中ではとび抜けて強かったABEのD・P（予選時7.3、決勝時7.2）に肩をならべている事実を再認識せねばならない。そして、22回全日本インカレにおける最高D・Pは、それよりさらに1.0も高いわけで、道インカレと全日本インカレのD・Pにおける壁はここに歴然と表れている。

緒言での「一体、中央選手権と比べ何において、どれほどの差が存在してい

(5) トランポリン競技規則, 20. 2. 6. 2, 20. 3. 2

るのか?」…を把握すべく本研究を進めてきたが、演技点とD・Pからみた全日本インカレとの厚い壁とは、果してここに見い出すことができる。ここに表れた較差をもとに、筆者は北海道の学生選手に対し、次の点を今日的課題とし、この課題の遂行に大きな期待をよせるものである。また、筆者自信、平素学生選手の指導・育成にあたっているので、この課題を少しでも早期に突破できるよう努力していきたい。

その課題とは、つまり『D・Pでは7.5に達する種目を用意』し、その種目構成の『習熟率は80% (演技点で24.0)』…である。この到達目標の突破こそ、全日本インカレでの上位入賞ライン…と考えるのである。いわんや『規定演技においても24.0』をマークしなければならないのであって、『合計得点で87.0』を設定したい。さらに、ここでいう全日本インカレにおける上位入賞とは、6位～4位のランクを想定していることを付記しておく。北海道学生選手の当面の課題と到達目標は、現在の實力からみてこのあたりが適当であろうと考えるからである。

トランポリン競技における技術革新とD・Pの高度化はとどまることをせず、正に日進月歩の今日である。これまでみてきた演技点とD・Pが、近い将来、どのように変化していくのかを今後も注意していきたい。

図3は、大会別にチャンピオンの自由演技（予選演技と決勝演技の2演技の平均）を演技点、D・P別にながめたものである。演技点においては、ABE（12回大会の）以外はすべて21点（習熟率70%）ラインを割っており、その推移ラインは「極端に右下りのN型」を示している。

D・Pにおいては、ABE（12回大会の）以外は7.0未満であり、KASAI（14回大会）は6点台にとどいていない。ISHIKAWA（15回大会）が6点台に復元させてはいるが、ABE（11回大会）、IMUKAI（13回大会）には及ばず6.3に終わっている。この年度推移ラインも演技点の場合と同様に「極端に右下りのN型」をみせている。こうしてみると、道インカレにおける過去五大会の優勝者の自由演技は、演技点とD・Pが正比例する状況を示しており、先に述べた

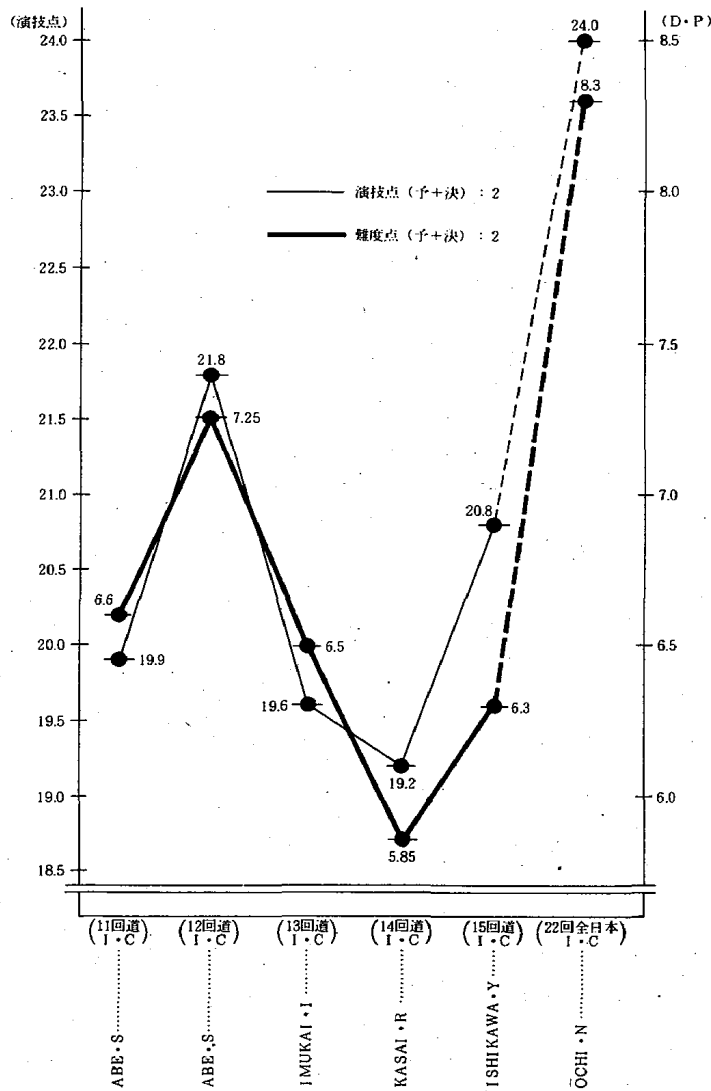


図3 大会別の優勝者の「演技点」・「難度点」

上位六名による平均推移とは異った型を示している。

トランポリン競技では、規定演技と自由演技1（本稿では予選演技という）の合計をもって予選得点とし、これによる上位十名の選手で自由演技2（本稿では決勝演技という）を演ずる⁽⁶⁾。そして予選得点と決勝演技の和（即ち合計得点）をもって順位を決定することとなっている。

自由演技においては、「何を、どのように演じたか」が評価判定される。「何

(6) (5)に同じ, 1. 3. 1

を」とは、運動種目をその難易度により数字化したもの⁽⁷⁾、つまり『難度点（本稿ではD・P）』を意味し、「どのように」とは、演技の内容を質的に評価するために、完璧な（非の打ちどころがない）演技を満点の10点として、演技姿勢、ジャンプの高さ、そして身体コントロール力等の欠如や乱れに対して0.1きざみの減点⁽⁸⁾を相応に課して作られた減点基準⁽⁹⁾をモノサシとして、実施種目の美しさ、雄大さ、安定性に関する度合いを計る、つまり『演技点』を意味する。

規定では演技点のみが計算されるが、自由演技においては、演技点のほかにD・Pも計算され⁽¹⁰⁾、この両方の和により優劣が決定されるので、選手にとっては熟慮断行が必要となる。自由演技においてこの計算方式が存在するかぎり、選手の難度志向は停まることのない筈である。

しかし、現行の競技規則では、この難度志向にはしりすぎる選手に対して一定の歯止めをかけていると言ってよい。それは5名の演技審判員により評価・判定された点数の内、最高点と最低点の二つが抹消され、残りの三つの点数が合算、もしくはその中間点との差異が予め定められた許容範囲⁽¹¹⁾を越えた場合には、中間点が3倍され、これが演技点として残る⁽¹²⁾仕組みになっている点にある。したがって、演技点に対する比重は大であり、裏を返すと、難度志向に比重をかけ過ぎる選手は結果的には勝者になりえる可能性が薄いことになる。ただし、演技点に差がない時には、D・Pが勝敗の鍵となることは確かである。

というわけで、結論づけると「いかにD・Pの高い種目を美しく、雄大に、そして確実に演ずるか」の一言につきるが、高難度種目を組入れればそれだけD・Pが上昇し優遇されるが、それだけ身体制御は難しさを増すことにもなる。トランポリン競技のこうした厳しさと合理性は、同時にこの競技ならではの魅力

(7) (5)に同じ, 20. 1. 1. ~ 20. 1. 5

(8) (5)に同じ, 20. 2. 1

(9) (5)に同じ, 23. 1. ~ 23. 4. 4

(10) (5)に同じ, 20. 2. 9. 1

(11) (5)に同じ, 20. 3. 1. ~ 20. 3. 1. 3

(12) (5)に同じ

TECHNICAL NAME	D・P	ALL HOKKAIDO INTERCOLLEGIATE					全日本 I・C	道IC (計) 多
		11	12	13	14	15		
PIKE BOUNCE	0.0		2	1			(3) 1	
STRADDLE BOUNCE	0.0	2	5	3	2	3	(15) 5	
TUCK BOUNCE	0.0			2	2	3	(7) 2.33	
1/2 TWIST TO SEAT	0.1	1	1	2		1	(5) 1.67	
SWIVEL HIPS	0.1	1		1			(2) 0.67	
1/2 TWIST TO FEET	0.1	1	2	2		1	(6) 2	
FRONT DROP ~ BACK DROP	0.2					2	(2) 0.67	
BACK・D~1/2 TWIST TO FEET	0.2			1			(1) 0.33	
3/4 BACK S・S	0.3			1		2	(3) 1	
3/4 FRONT S・S	0.3		2	1		2	(5) 1.67	
BACK PULLOVER	0.3		2	1	2	5	(10) 3.33	
TUCK BACK S・S	0.4	6	5	6	6	6	(29) 9.67	
PIKE BACK S・S	0.5	5	5	5	6	4	(25) 8.33	
LAYOUT BACK S・S	0.5	6	5	4	6	6	(27) 9	
PIKE FRONT S・S	0.5	2			1	2	(5) 1.67	
BACK CODY (TUCK)	0.5			1			(1) 0.33	
LAYOUT BARANI	0.5	5	6	6	7	6	(30) 10	
PIKE BARANI	0.5			1			(1) 0.33	
		11	12	13	14	15	59	

TECHNICAL NAME	D・P	ALL HOKKAIDO INTERCOLLEGIATE					全日本 I・C	道IC (計) 多
		11	12	13	14	15		
1 1/4 BACK S・S (TUCK)	0.5		2	1	2	3	(8) 2.67	
BARANI BALLOUT	0.6	3	3	2	4	4	(16) 5.33	
FULL TWIST	0.6	4	3	5	5	3	(20) 6.67	
RUDOLPH	0.7	4	3	3	4	2	(16) 5.33	
1 1/4 TUCK FRONT S・S	0.7	5	3	3	4	2	(17) 5.67	
1 1/4 PIKE FRONT S・S	0.8				1		(1) 0.33	
DOUBLE BACK S・S (TUCK)	0.8		1		2		(3) 1	
DOUBLE TWIST	0.8	1	1	1	1		(4) 1.33	
SEROLOD	0.8	2	2	1	1		(6) 2	
DOUBLE BACK S・S (PIKE)	0.9					1	(0) 0	
BARANI OUT (TUCK)	0.9	6	3	3	4	2	(18) 6	
BARANI OUT (PIKE)	1.0	3	2	1	2	1	(9) 3	
1/2 IN 1/2 OUT (TUCK)	1.0	2	1				(3) 1	
FULL OUT (TUCK)	1.0					1	(0) 0	
PORPUS OUT (TUCK)	1.0					2	(0) 0	
1/2 IN 1/2 OUT (PIKE)	1.1		1				(1) 0.33	
2 3/4 TUCK FRONT S・S	1.1		1				(1) 0.33	
FULL IN BARANI OUT (TUCK)	1.1					2	(0) 0	
		11	12	13	14	15	40.99	

※ 表中の (TUCK) は抱型, (PIKE) は鞍型を意味する
 ※ 表中の S・S は, SOMER SAULT (宙返り) を意味する

図4 自由演技構成の年次推移 (1~6位入賞者の競技カードより抜粋, 集計)

表7 難度別・年度別演技構成比率（申告種目による）
 ※表中、上段は個数（計）、下段はその比率を示す

大会 D・P	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回	第22回	北海道インカレ過去5大会合計（率）		0	10	20	30	40	50 (%)
	道I・C	道I・C	道I・C	道I・C	道I・C	日本I・C	個数	%						
0.0~	5	10	11	4	8	0	38	12.7	→					
0.1	(8.3)	(16.6)	(18.3)	(6.6)	(13.3)	(0)								
0.2	0	0	1	0	2	0	3	1.0	→					
	(0)	(0)	(1.6)	(0)	(3.3)	(0)								
0.3	0	4	3	2	9	0	18	6.0	→					
	(0)	(6.6)	(5.0)	(3.3)	(15.0)	(0)								
0.4	6	5	6	6	6	5	29	9.7	→					
	(10.0)	(8.3)	(10.0)	(10.0)	(10.0)	(8.3)								
0.5	18	18	18	22	21	16	97	32.3	→					
	(30.0)	(30.0)	(30.0)	(36.6)	(35.0)	(26.6)								
0.6	7	6	7	9	7	5	36	12.0	→					
	(11.6)	(10.0)	(11.6)	(15.0)	(11.6)	(8.3)								
0.7	9	6	6	8	4	3	33	11.0	→					
	(15.0)	(10.0)	(10.0)	(13.3)	(6.6)	(5.0)								
0.8	4	3	4	3	0	10	14	4.7	→					
	(6.6)	(5.0)	(6.6)	(5.0)	(0)	(16.6)								
0.9	6	3	3	4	2	6	18	6.0	→					
	(10.0)	(5.0)	(5.0)	(6.6)	(3.3)	(10.0)								
1.0	5	3	1	2	1	11	12	4.0	→					
	(8.3)	(5.0)	(1.6)	(3.3)	(1.6)	(18.3)								
1.1	0	2	0	0	0	4	2	0.7	→					
	(0)	(3.3)	(0)	(0)	(0)	(6.6)								
合計	60	60	60	60	60	60	300	100.1						

図5 北海道インカレ，11回～15大会の難度別演技構成比率

にもなっており、宿命と魅力が同居し、競技選手の心を掴んではなさない。

北海道インカレにおける過去五大会の自由演技点構成種目とその率について、とくに種目ごとの推移をとらえようとしたのが図4であり、これをD・P別にまとめたのが表7、さらに道インカレ五大会を合計し、D・P別にその占める率をみたのが図5である。図4と表7の右欄には、全日本インカレとの較差をみるために、それぞれの種目とD・P欄に構成（使用）個数と率を示してある。

これらもわかるように、D・P 0.3以下の種目については道インカレのみで使用され、この内D・P 0.0の種目構成率は8.33%である。これは15回大会においてもいっこうに減る気配はなく、10%の構成率となっている。加えて、D・

P 0.1～0.3の種目がとくに15回大会において数多く使用されており、先に述べた15回大会のD・P合計の低さを証明するものである。中でも、 $\frac{3}{4}$ Back S・SとFront Drop～Back Dropがともに2個の構成となっているのは、明らかに $\frac{3}{4}$ Back S・SからCodyにつなげることができないため、こうしたところにD・Pの格下げを召いている原因が存在する。Back Pulloverについても $1\frac{1}{4}$ Back S・Sから、もしくはFront Drop～Back Dropからつないでいることが理解でき、後者の場合にはD・P格下げと競技の魅力半減につながっている。

D・P 0.4～0.5の種目中、全日本インカレ、道インカレともに構成率が高く表れているのは、Back S・SのTuck, Pike, Layoutの各型、そしてLayout Baraniである。全日本インカレにおいては、これらの種目がいわゆる「ツナギ技」として位置づいているのに対して、道インカレでは「重要な一種目」として位置づいているのが特徴的である。この傾向はここ数年続くものと推察する。

D・P 0.6～0.7の種目中、Barani Ballout以外の種目については、15回大会で減少傾向がみられ、実はこのあたりの種目が競技選手にとっては中級レベルのD・Pに相当し、これ以上のD・P種目とともにトランポリン競技ならではの見せ場とD・P獲得の重要な鍵になる。全日本インカレにおける構成種目とその率は、中級D・Pから上級D・Pへの種目使用の様相がよく表れている。逆に道インカレにおいては、このあたりから構成に組み入れるのが難しくなっており、D・P 0.8種目では構成率も全体に低く、15回大会では皆無の状況にある。

さらに、0.9以上のD・P種目では、道インカレのBarani OutのTuck型、Pike型が毎大会、数名の選手によって組み入れられてはいるものの、回を追うごとにその率は低くなる傾向を示し、これと同D・Pもしくはこれ以上のD・P種目を自由演技に組み入れる力量はもち合わせていないのが実態である。Barani Outは全日本インカレにおいてもその構成は極めて高く、入賞者の殆どがTuck型とPike型の両方を組み入れてD・P上昇をはかっている。しか

表8 第15回北海道学生・第22回全日本学生 選手権大会の1~6位入賞者の自由演技構成種目の比較

SOMERSAULT	TWIST		TECHNICAL NAME	SEAT OTHERS	FEET									BACK									STOMACH									TOTAL			
	IN	OUT			FORWARD			BACKWARD			FORWARD			BACKWARD			BACKWARD			H	N	H (%)	N (%)												
					T	P	L	T	P	L	T	P	L	T	P	L	T	P	L																
					H	N	H	N	H	N	H	N	H	N	H	N	H	N	H					N	H	N	H	N							
0	0		Straddle (0.0)	3																			3	0	8	0									
			Tuck (0.0)	3																				3			0								
	½		½ Twist to Feet (0.1)	1 (H)																			1	0			(13.3)	(0)							
			½ Twist to Seat (0.1)	1 (H)																				1			0								
½	0		Front D ~ Back Drop (0.2)															2				2	0	2 (3.3)	0 (0)										
¾	0		Diving (0.3)					2															2	0	9 (15)	0 (0)									
			¾ Back S · S (0.3)																					2			0								
	Back Pullover (0.3)																5						5	0											
1	0		Tuck Back S · S (0.4)						6	5													6	5	29 (48.3)	28 (46.6)									
			Pike Back S · S (0.5)								4	6												4			6								
			Layout Back S · S (0.5)											6	6									6			6								
			Pike Front S · S (0.5)							2														2			0								
	½		Pike Barani (0.5)																				0	1											
			Barani (0.5)																					6			3	(48.3)	(46.6)						
	1			Full Twist (0.6)																		3	3												
	1½			Rudolph (0.7)						2	2											2	2												
2			Double Twist (0.8)																		2		0	2											
1¼	0		1¼ Back S · S (0.5)																			3	0	7 (11.6)	4 (6.6)										
	½		Barani Ballout (0.6)																		4	2													
	1½		Serolod (0.8)																		2		0			2									
1¾	0		1¾ Front S · S (0.7~0.8)																		2	1	3		2 (3.3)	4 (6.6)									
2	0	0	Double Back S · S (0.8~0.9)																			3	1			0	4								
	0	½	Barani Out (0.9~1.0)																			2	5	1	6	3	11								
	½	½	½ In ½ Out (1.0)																			2				0	2								
	0	1	Full Out (1.0)																			1				0	1								
	1	½	Full In Barani Out (1.1)																			2				0	2								
2¼	0	½	Porpus Out (1.0)																		2				0	2									
2¾	0	0	2¾ Front S · S (1.1)																		2				0	2									
TOTAL			HOKKAIDO	1	7	4	3	10	9	4	11	4	0	0	0	5	0	0	2	0		60													
			NIPPON	0	0	10	10	5	11	7	11	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0														
			HOKKAIDO	1	7	17			24			4			5			2			100.2	99.8	99.7												
			NIPPON	0	0	25			29			6			0			0			99.9														
		%	11.6	11.6	28.3			40.0			6.6			8.8			3.3																		
		%	0	0	41.6			48.3			10			0			0																		

※ 表中の「T」は TUCK (抱型), 「P」は PIKE (蝦型), 「L」は LAYOUT (伸型) を意味する
 ※ 表中の「H」は北海道インカレ, 「N」は全日本インカレを示す
 ※ 表中の S · S は, SOMER SAULT (宙返り) を意味する

も、この種目以外の Fliffis⁽¹³⁾ 系種目を積極的に組み入れているのが特色である。道内学生選手の上位グループにとっては、D・P 0.8 以上の種目を一つでも多く組み入れられるよう邁進してもらいたいし、D・P 0.3 以下の種目を一刻も早く除去し、現時点での持ち技を一層発展させた種目をもって自由演技を構成できるよう望むところである。

表 8 は、15 回道インカレと 22 回全日本インカレにおける自由演技構成種目を回転数、ならびに捻り回数別に整理し、さらに身体のどの部分でベッドを踏み込んでいるのか、そしてその回転方向はどうなっているのか…を系統別に整理したものである。両大会ともに昭和 62 年度開催の競技会であり、その意味では、これまでみてきた年次推移とは視点が変わり、現況下の選手の力量を明確に把握できよう。

トランポリン運動の特性に、足（裏）で跳躍する以外に、膝で、背で、腰で、腹で跳躍できる…がある⁽¹⁴⁾。レクリエーション・トランポリンを指導する際には、先づこの身体各部で跳躍可能な特性を生かした種々の基本ジャンプを教えるのが通常の方法である。また、競技トランポリンの入門編の指導に際してもこの方法に大差はないが、選手の技能が向上するにつれて、腰での跳躍種目や、いわゆる低難度種目に費す時間は次第に短くなり、遂には全くその必要がなくなる。これは競技における D・P 合計が演技点に加算され勝負が決することに起因する現象であり、中でも腰での跳躍種目では高さがとれず発展性に欠けること、そして D・P の低い（あるいは D・P のない FEET BOUNCE⁽¹⁵⁾）種目は種目数にこそなりえるが、D・P 稼ぎには何んの決め手にもなりえないため、必然的に演技構成種目からはずさざるをえなくなる…等によるものである。

(13) (4)に同じ、P. 20・34行～P. 21・15行

(14) 「TRAMPOLINE ILLUSTRATED」長谷川輝紀・大林正憲共著、P. 10・4行～7行、1969、4. 道和書院

(15) 回転も捻りも伴わない種目で、Tuck Bounce・Pike Bounce・Straddle Pike Bounce・Knee Drop・Seat Drop…などをさす

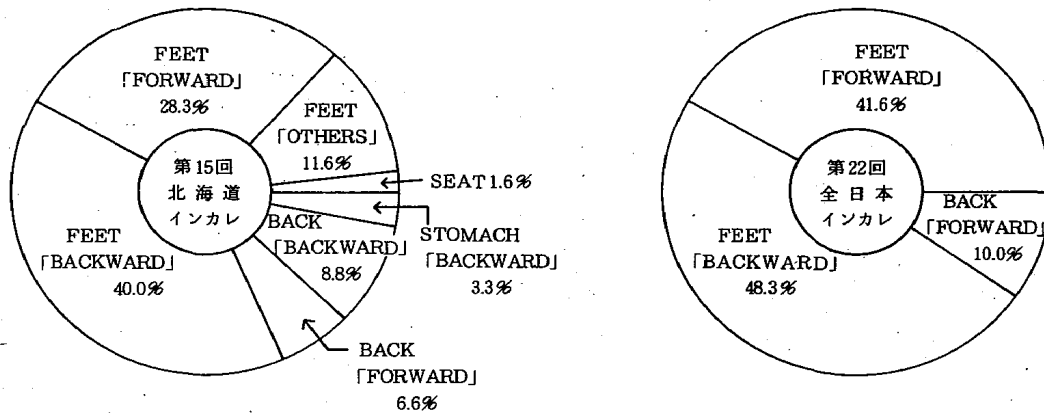


図6 系統別にみた演技構成比率（申告種目による）

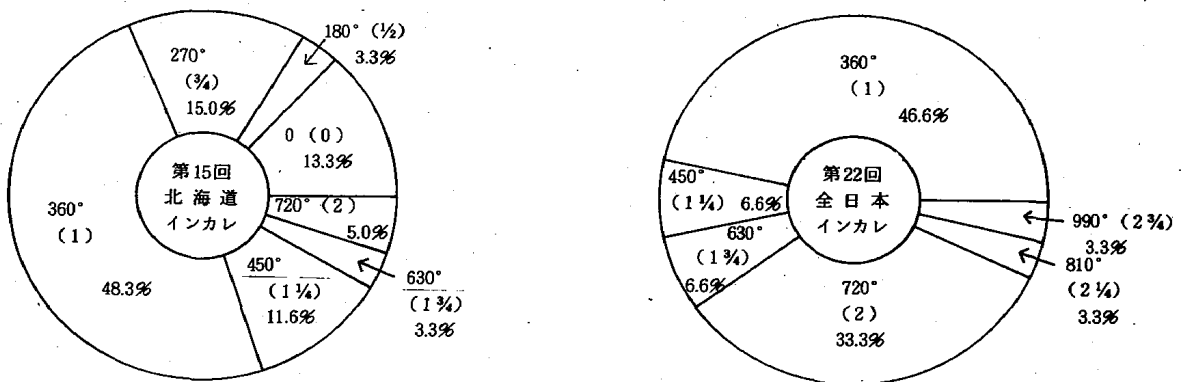


図7 回転（度）数からみた演技構成比率（申告種目による）

図6・図7は、表8での比率をもとに系統別に図示したものである。図6から、選手が身体のだの部位で着床し、よりベッドを押し沈め、より高い飛躍を生み出すかが重要な因子になっているかを理解することができる。

全日本インカレにおいては、最も多く組み入れられていたのが FEET 「BACKWARD」、即ち足（裏）での踏み込みからの後方系種目（48.3%）であり、次いで FEET 「FORWARD」（足からの前方系種目）の 41.6%、残りの 10% は BACK 「FORWARD」（背からの前方系種目）となっていた。

これに比べ道インカレでは、実に七系統と多く表れ、このうち全日本インカレでの三系統に相当する構成率は約 75% であり、残りの 25% には FEET

「OTHERS」(足からの D・P 0.0 ~ 0.1 種目), SEAT (腰落ち系種目), STOMACH 「BACKWARD」(腹落ちからの後方系種目), BACK 「BACKWARD」(背落ちからの後方系種目) …があがっていた。これら四系統の D・P はすべて 0.0 ~ 0.3 の範囲にとどまり, 大きな反省材料として残っている。

図 7 では, 全日本インカレ, 道インカレともに 360 度回転が一番多く用いられている点では共通しているが, 全日本インカレでは 360 度未満の回転は皆無である。これに比し, 道インカレでのそれに相当する率は 31.6% にものぼっている。また, 720 度回転, もしくはそれ以上の回転度数の構成率をみると, 道インカレでは 720 度回転の 5% のみであり, 全日本インカレでは 720 度回転が 33.3%, 810 度回転が 3.3%, 990 度回転が 3.3% …となっており, これらの合計は約 40% となる。

表 8 で, 720 度回転種目には Double Back S・S のほか 4 種目があがっているが, 道インカレにおいては Barani Out の Tuck 型が二名, Pike 型が一名しかおらず, これ以外の種目構成はすべて全日本インカレでのものであった。Double Back S・S を除く他の 720 度回転種目は, フリフィス [Fliffis] と呼ばれ, 2 回宙返りに捻り運動が複合された種目である。Fliffis は, 今や競技会において不可欠な種目として位置づき, 世界選手権大会や各種国際競技会においては, 自由演技構成種目の約半分が Fliffis で, 残りの半分はトリフィス [Triffis]⁽¹⁶⁾ で…といった内容で競い合っているのが実態である。

— 開始種目について —

選手にとって開始種目はきわめて重要な意味をもつ。予備の STRAIGHT BOUNCE⁽¹⁷⁾ で十分な高さを取り, 身体のバランスを保った上での「入り技」に

(16) (4)に同じ, P. 59・27行~P. 60・3行

(17) (4)に同じ, P. 55・35行~P. 56・2行

表 9 開始種目と使用率 (申告時のもので、欄中の上段は選手数、下段は率を示す)

種 目 名	D・P	北海道学生選手権					5大会計
		11回	12回	13回	14回	15回	
¾ BACK S・S (L)	0.3					2	2
						33.3	6.7 %
BACK S・S (L)	0.5		2	2			4
			33.3	33.3			13.3 %
1¼ BACK S・S (T)	0.5				2	2	4
					33.3	33.3	13.3 %
FULL TWIST	0.6			1			1
				16.7			3.3 %
1¾ FRONT S・S (T)	0.7		1				1
			16.7				3.3 %
BARANI OUT (T)	0.9	3	1	2	2	1	9
		50.0	16.7	33.3	33.3	16.7	30.0 %
	1.0	1	1	1	2	1	6
		16.7	16.7	16.7	33.3	16.7	20.0 %
½ IN ½ OUT (T)	1.0	2					2
		33.3					6.7 %
	1.1		1				1
			16.7				3.3 %
TOTAL		6	6	6	6	6	30
		100	100.1	100	99.9	100	99.9 %

関しては、これまでいくつかの研究報告があり⁽¹⁸⁾、当該選手が構成した自由演技種目の中では、最も D・P の高い種目か、またはそれに準ずる D・P の種目を開始種目としているケースが多いことが知られている。

- (18)・『Trampoline 競技における自由問題の構成と難度研究』— 第 12 回全日本学生選手権出場選手の Difficulty card 分析 —
 田野有一・藤田一郎, 1977, 12. 北海道体育学会
- ・『トランポリン競技における男子自由演技種目について』大林正憲, 1978, 10. 大阪商業大学論集第 51・52 号合併号
 - ・『トランポリン競技における自由演技種目の開始技と終了技について』大林正憲・長谷川輝紀, 1979, 10. 日本体育学会
 - ・『北海道トランポリン競技界の課題』田野有一, 1980, 7. 小樽商科大学人文研究第 60 輯

本研究対象である道インカレの五大会における開始種目と、その占める率(使用率)をみたのが表9である。五大会中で平均D・Pの最も高かった11回大会と、これに次ぐ平均D・Pを示していた14回大会での開始種目は、いずれも3種目と他の大会でのそれより少なく、その中であって、とくに Barani Out を開始種目とする選手が多く、11・14回大会では6人中4人もみられる。この種目は他の三大会においても使用されており、Tuck型、Pike型の両方についてこのことがいえる。そして五大会計の欄からもわかるように、半数の選手が型の違いはあるものの Barani Out で自由演技のスタートをきっている。この種目は Fliffis 系の第一歩に位置しており、D・Pをアップさせる点からも選手にとっては好都合の種目である。着床の先どりについてもそれほど難しくはなく、競技会において一般化してきている特色をもっている。表には示していないが、22回全日本インカレにおいても六選手中、二選手が Barani Out を開始技として組み入れていた。

道インカレにおいて、とくに13回大会以後は、これ以上のD・Pを有する開始種目はない。全日本インカレは、Barani Out (PiKe型) が二名のほかは、Full Out (Tuck型)、Full In Barani Out、Double Back S. S (Pike型)、 $\frac{1}{2}$ In $\frac{1}{2}$ Out (Tuck型) ……の4種目が各選手によって使用されており、D・P 0.9～1.1の種目で演技を開始している。つまり、0.9未満のD・P種目はひとつもみられないが、道インカレにおいては、逆にこうしたD・P種目が開始技として多く組み入れられているのも特徴的である。

— 終末種目について —

終末種目についてみると(表10)、表全体にバラツキをみせ、種目数も開始技のそれより多くなっている。その中でも Barani Ballout や Serolod といった「背からの種目」に比較的高い比率がみられ、大会回数を追うごとに Barani Ballout へ、つまりD・Pの低い方の種目へ流れていく傾向にある。これについては逆行を強く望むところである。

表 10 終末種目と使用率（申告時のもので、欄中の上段は選手数，下段は率を示す）

種 目 名	D・P	北海道学生選手権					5大会計
		11回	12回	13回	14回	15回	
FRONT S・S (P)	0.5	2			1	2	5
		33.3			16.7	33.3	16.7 %
BACK S・S (P)	0.5		2				2
			33.3				6.7 %
BARANI	0.5			1			1
				16.7			3.3 %
CODY	0.5			1			1
				16.7			3.3 %
BARANI BALLOUT	0.6	1			2	2	5
		16.7			33.3	33.3	16.7 %
FULL TWIST	0.6			1		1	2
				16.7		16.7	6.7 %
RUDOLPH	0.7		1		1	1	3
			16.7		16.7	16.7	10.0 %
DOUBLE TWIST	0.8		1	1	1		3
			16.7	16.7	16.7		10.0 %
DOUBLE BACK	0.8			1			1
				16.7			3.3 %
SEROLOD	0.8	2	2	1	1		6
		33.3	33.3	16.7	16.7		20.0 %
BARANT OUT (T)	0.9	1					1
		16.7					3.3 %
TOTAL		6	6	6	6	6	30
		100	100	100.2	100.1	100	100 %

「背からの種目」を終末技として組み込むにあたっては、9種目めの $\frac{3}{4}$ Front S・S、 $1\frac{3}{4}$ Front S・S、 $2\frac{3}{4}$ Front S・S…等の種目とともに、高さを落とすことなく実施できるよう心がける必要がある。9種目めの後半に背で十分にベッドを沈め、10種目めを雄大に演じてほしいものである。得てして、高さに欠けた尻すぼまり的な演技になりやすいので注意を要する。トランポリン競技における終末種目とその習熟度は、正に演技のしめくくりとして印象づける上からも、非常に重要であり、軽々に演ずることは禁物である。

背からの種目以外の終末種目として、Front S・Sが16.7%（全体で）となっ

ており、11・15回大会で各二名の選手が使用している。これはD・Pから考えても、演技のフィニッシュを決める意味からしても、なんとも心細いかぎりで道学生選手のレベルをうかがわせるものである。

22回全日本インカレでの終末種目は、SerolodとPorpus Out (Tuck型)が各二名、Barani BalloutとDouble Twistが各一名…となっており、そのD・Pは0.6～1.0の範囲であった。

表11 第15回北海道インカレ・第22回全日本インカレ チャンピオンの演技内容比較

選手名	所属学年年齢	演技順	申告種目	難度点	予選時実施種目	難度点	決勝時実施種目	難度点	SOMERSAULT			TWIST		
									FEET		BACK	IN	OUT	
									FORWARD	BACKWARD	FORWARD			
第15回北海道学生選手権者	石川義浩	1	BARANI OUT (P)	1.0	BARANI OUT (P)	1.0	BARANI OUT (P)	1.0	2			0	½	
		2	BACK S・S (L)	0.5	BACK S・S (L)	0.5	BACK S・S (T)	0.4		1		0	0	
		3	BARANI OUT (T)	0.9	BARANI OUT (T)	0.9	BARANI OUT (T)	0.9	2			0	½	
		4	BACK S・S (P)	0.5	BACK S・S (P)	0.5	BACK S・S (P)	0.5		1		0	0	
		5	BARANI (L)	0.5	BARANI (L)	0.5	BARANI (L)	0.5	1				½	
		6	FULL TWIST	0.6	FULL TWIST	0.6	FULL TWIST	0.6		1			1	
		7	RUDOLPH	0.7	BARANI (P)	0.5	BARANI (P)	0.5	1					½
		8	BACK S・S	0.4	BACK S・S	0.4	BACK S・S (L)	0.5		1		0	0	
		9	1¼ FRONT S・S (P)	0.8	1¼ FRONT S・S (P)	0.8	1¼ FRONT S・S (P)	0.8	1¼			0	0	
		10	BARANI BALLOUT	0.6	BARANI BALLOUT	0.6	BARANI BALLOUT	0.6				1¼	½	
TOTAL			10	6.5	10	6.3	10	6.3	7¾	4	1¼	3½	3½	
第22回全日本学生選手権者	大地信宏	1	FULL OUT (T)	1.0	FULL OUT (T)	1.0	FULL OUT (T)	1.0		2		0	1	
		2	BARANI OUT (P)	1.0	BARANI OUT (P)	1.0	BARANI OUT (P)	1.0	2			0	½	
		3	DOUBLE BACK S・S (T)	0.8	DOUBLE BACK S・S (T)	0.8	DOUBLE BACK S・S (T)	0.8		2		0	0	
		4	BARANI OUT (T)	0.9	BARANI OUT (T)	0.9	BARANI OUT (T)	0.9	2			0	½	
		5	BACK S・S (P)	0.5	BACK S・S (P)	0.5	BACK S・S (P)	0.5		1		0	0	
		6	FULL IN BARANI OUT (T)	1.1	FULL IN BARANI OUT (T)	1.1	FULL IN BARANI OUT (T)	1.1	2			1	½	
		7	BACK S・S (T)	0.4	BACK S・S (T)	0.4	BACK S・S (T)	0.4		1		0	0	
		8	BACK S・S (L)	0.5	BACK S・S (L)	0.5	BACK S・S (L)	0.5		1		0	0	
		9	2¼ FRONT S・S (T)	1.1	2¼ FRONT S・S (T)	1.1	2¼ FRONT S・S (T)	1.1	2¼			0	0	
		10	PORPUS OUT (T)	1.0	PORPUS OUT (T)	1.0	PROPUS OUT (T)	1.0				2¼	0	½
TOTAL			10	8.3	10	8.3	10	8.3	8¾	7	2¼	1	3	
★石川義浩			規定演技持点	21.7	演技点	20.6	演技点	21.0	合計得点 75.9					
★大地信宏			規定演技持点	25.4	演技点	23.1	演技点	24.9	合計得点 90.0					

※ 表中、(T)はTUCK、(P)はPIKE、(L)はLAYOUT……の型を意味する
 ※ 表中、S・SはSOMER SAULT (宙返り)を意味する

表11は、15回道インカレと22回全日本インカレにおける優勝者の演技内容

を示すものである。右欄には回転数と捻り回数を、下欄には演技点、ならびに合計得点を付記した。

競技会においては、競技開始の2時間前までに『競技カード』の提出が義務づけられている。⁽¹⁹⁾ 競技カードには自由演技内容の記入欄が2ヵ所あり、1ヵ所はいわゆる予選としての自由演技、もう1ヵ所は決勝の自由演技欄である。このカードは難度審判員によって予めD・P・その他が点検される仕組みになっている⁽²⁰⁾。カードに記された構成種目は、試合中、選手自身の都合により変更されることがあるが、これは競技規則により認められている⁽²¹⁾。本表の石川選手にみられる「申告種目に対しての演技種目の変更」がそれである。

さて、具体的に両選手の演技内容をながめてみると、石川選手の申告D・Pは6.5であり、回転数13、捻り回数4½を申告している。一方、大地選手はD・P8.3で、回転数18、捻り回数4となっており、カード提出時点で大地選手がD・Pで1.8、回転数で5回優位に立ち、捻り回数においてのみ石川選手が半回優っている。

予選演技において、石川選手は7種目めのRudolphをPike Baraniに変更、D・Pで0.2を失い6.3のD・Pに終わる。この時の演技点は20.6（習熟率68.7%）であった。大地選手の場合、演技内容は申告どおりのD・P8.3を続行、演技点は23.1（習熟率77%）である。規定の持ち点で既に3.7の差であり、予選の自由演技終了時点での得点差は8.2（規定差3.7＋予選演技差4.5）に広がっている。

決勝演技で、大地選手はやはり申告どおりの種目と演技順で、演技点において予選時より1.8アップの24.9（習熟率83%）をマークしている。石川選手は申告内容を3ヵ所にわたって変更したが、D・Pは予選時同様の6.3であり、演技点は予選時より0.4アップの21.0（習熟率70%）に終わった。結果、決勝で

(19) (5)に同じ, 7. 2

(20) (5)に同じ, 24. 2

(21) (5)に同じ, 7. 4

の二選手の得点差は5.9とさらにひらき、合計得点差は14.1となっている。

別々の競技会のため、計算上でしか較差を追えないが、石川選手の合計得点は、22回全日本インカレの成績に照合すると第5位に相当する。

※実際、石川選手は22回全日本インカレに出場しているが、出場区分はBクラス。その理由は、Aクラスでの規定問題（予め定められた五種目を組み入れ、10種目を構成、実施する）中のDouble Back S・Sがマスターされていないことによる。結局、同選手はBクラス3位（合計得点71.2）にあまんじた。

ところで、両選手の演技順で目につくのは、一つに終末種目を除く9種目が足（FEET）からの宙返りで構成されているという点、いま一つは、大地選手の7～8種目にかけて後方系（BACKWARD）の連続がみられるほかは、『回転方向が交互にくり返されている』点である。前者の場合は、D・Pの上昇に結びつくことにもなり、後者の場合には演技続行中の着床箇所の移動修正を迫られた際にも対処しやすく、また演技全体に変化がみられてアピールするのに役立つと考えられる。

総 括

第11回～第15回北海道学生トランポリン競技選手権大会、および第22回全日本学生トランポリン競技選手権大会における自由演技種目について、それぞれ考察してきたが、結果として次の点が要約できよう。

I. 演技構成面から

<北海道インカレレベル>

- ① D・P 0.0～0.3の種目の構成率が目立って高く、過去五大会平均で19.7%、15回大会では31.6%にもものぼっている

- ② D・P 0.8以上の種目では、年々、自由の構成種目から姿を消す傾向にあり、毎大会組み入れられている Barani Out (Tuck 型, Pike 型ともに) も次第に減少してきている
- ③ Back S・S の Tuck 型, Pike 型, Layout 型の三型の構成率が極めて高く、他の構成種目から考えて「重要な一種目」として取り扱われている
 <全日本インカレレベル>
- ① D・P 0.3 未満の種目は構成内容からはずされ、すべて D・P 0.4 以上の種目をもって構成されている。D・P 0.8～1.0 種目が各 10% 以上構成率を示し、最高 D・P であった 1.1 をも含めた D・P 0.8 以上の構成率は 51.5% と高く表れている
- ② Back S・S の三型については、同インカレ同様に構成率は高いが、他の構成種目から考えて「ツナギ技」としての性格が強くてている
- ③ 構成種目のすべてが FEET (足)、および BACK (背) からの跳躍種目でまとめられ、その回転数はすべて 360 度以上である

15 回道インカレと 22 回全日本インカレでの平均 D・P の較差は 2.9 であり、22 回全日本インカレにおける最低 D・P (6.2) は、14・15 回道インカレでの最高 D・P にほぼ匹敵している。両大会間の壁の厚さを物語るものである。

II. 演技点面から

- ① 過去五大会の道インカレにおいては、14 回大会を除いた四大会の推移から「演技点の上昇傾向, D・P の下降傾向」が認められる。15 回大会での平均演技点は 20 点近くまで伸びてきているが、平均 D・P (4.33) は、11 回大会の最低 D・P に匹敵するまで落ちてきている。
- ② 22 回全日本インカレにおける規定と自由の平均演技点の差は、0.5 と僅かであるが、15 回道インカレにおけるそれは 1.9 (全日本インカレの約 4 倍) と大きく表れている。また、この両大会における平均演技点の較差は規定で 1.0、自由で 2.4 であり、ここにも全日本学生選手との壁を見いだすことがで

きる。つまり、演技点とD・Pの両面でかなりの隔たりをみせている。

Ⅲ. 競技歴, その他の面から

- ① 22回全日本インカレの上位6名は、全員、私立大学の1・2年次生で占められ、内2名は体育系大学生である。また、東京・大阪の大都市に限られた、いわゆる中央選手であり、殆どの者が高校時代まで各種トランポリン競技会において上位成績を収めている。六選手の平均学年と平均年齢は、1.5年、18.5歳である
- ② 11回～15回道インカレの上位6名(計30名)は、全員、国立大学の2～4年次生であり、大学入学当初はまったくの初心者で、その後トランポリン競技を本格的に始めている。30名の平均学年と平均年齢は、3.06年、20.2歳である

Ⅳ. 北海道学生選手の課題

過去、全日本インカレにおいて道内選手が二度(19回大会, 20回大会)にわたって上位入賞を果たしており、レベル較差や地方選手としてのハンディキャップはあるものの、これらを克服していくために、次のように課題をまとめてみたい。

- ① D・P 0.3以下の種目は、一刻も早く自由演技の構成種目から除去し、これに代わる種目のマスターに努める。
- ② 現在の持ち技を生かし、より発展させた種目の獲得、即ち「同系統種目でD・P上昇が望める種目(とくにD・P 0.6～0.8に相当する種目)への転換」を図る。
- ③最後に、北海道学生選手が今後の全日本インカレにおいて、4位～6位(当面の目標として)入賞を果たすために、筆者としては『規定、自由1(予選演技)、そして自由2(決勝進出)の三演技の演技点は各24.0(習熟率80%)、二つの自由演技でのD・P(合計)は各7.5、つまり合計得点で87.0』…の目標ラインを設定するものである。